

## 赤江瀑「海贅考」における 〈フォークロア〉の受容と引用について

道 合 裕 基

はじめに

赤江瀑（1933–2012）は、独自の幻想的な作風で知られる。現在でも、その幻想性に魅了された多くの読者を擁する。赤江は、幻想文学を対象として贈られる第12回・泉鏡花文学賞を、エッセイ『海峡』（1983）と作品集『八雲が殺した』（1984）で受賞している。赤江が、幻想文学の名手として知られる泉鏡花の名を冠した賞を受賞していることは、彼の作品世界がいかなるものであるかを端的に物語っている。

そのような幻想的作風をもつ赤江の代表作の一つが、「海贅考」（1979）である<sup>1)</sup>。「海<sup>さが</sup>の性」の題で、1979年『問題小説』7月号に掲載され、単行本に初収録される際、現在の題に改められた。これまで赤江は、フォークロアの活用、もしくは、フォークロア的傾向を強く打ち出した世界観の作品を発表している<sup>2)</sup>。代表作である「八雲が殺した」では、小泉八雲（1850–1904）の『骨董』（Kotto 1902）収録の一篇「茶碗の中」（“In a Cup of Tea”）を採り上げ、八雲が「茶碗の中」を再話するにあたり、原典とは異なる「未完」の作としたことに対する解釈を披露している。「海贅考」もまた、多くの赤江作品と同様に、フォークロアを活用した物語となっているのである。

赤江の作品は、熱烈な読者を多く有するが、残念ながら、彼の作品についての研究が進展しているとは言い難い。作品集は多く刊行されているが、作品集所収の解説の他には、個別の作品を採り上げた論文があまりない。特筆すべきものとしては、『幻想文学』誌上での特集や、河出書房新社から『赤江瀑の世界』という解説書が刊行されている程度である。「海贅考」についても、怪奇・幻想小説のアンソロジーによく収録されるものの、解説などで触れられる程度であり、管見の限り、代表作であるにも関わらず、単独での研究は発表されておらず、詳細な検討はなされていないのが現状である<sup>3)</sup>。

本論は、「海贅考」における主人公の帯びる〈境界性〉や、物語の重要なモチーフである〈エビス信仰〉、水死者に纏わる俗信などの要素に注目し、赤江の文学における〈フォークロア〉の受容と、その引用について考察するものである<sup>4)</sup>。本論で、フォークロアの要素に注目するのは、先述の赤江の文学におけるモチーフとして頻繁に登場するからである。加えて、「海贅考」の物語後半では、〈作者のあとがき〉が付され、「海贅考」の物語理解の中核となる俗信の事例についての民俗学の専門書からの引用が展開されるからである。そこで、「海贅考」におけるフォーク

ロアの要素と、その引用の意味について検討していきたい。

## 1. 「わたし」の帯びる〈境界性〉

「海贅考」の具体的な考察に先立ち、便宜的に「海贅考」の梗概を掲げる。

### 【「海贅考」の梗概】

主人公の「わたし」と妻が、特に理由もなく、自殺することを決意し、放浪の旅に出る。やがて、鐘ヶ関という海沿いの集落に辿り着く。この地で二人は入水自殺することにした。だが、その入水自殺の結果、妻は溺死し、「わたし」は、漁船に引き上げられ、遺体収容施設で突如息を吹き返した。そこで、「わたし」は、救助してくれた漁師・土屋亀祐<sup>つちや かもすけ</sup>の一家の世話になることになった。「わたし」は、土屋の手伝いをして、この地に馴染んでいく。村人からも〈土屋のエビス〉と呼ばれ、親しまれる。

しかし、「わたし」は、その後、漁の最中に船から転落したり、誤って井戸に落ちたりするなどの水に関する事故に巻き込まれる。「わたし」は、自分だけが助かったので、妻の亡霊が、自分を死に誘いこもうとしているのではないか、と思い至る。姿は見えないが、「わたし」は、死んだ妻に対して、自分はまだ死ねないし、この地で骨を埋めるつもりであると思いを吐露する。こうして、第二の人生を歩んでいこうとする「わたし」の決意が示されたところで、物語は終わる。

ところが、続いて、〈作者のあとがき〉という文章が始まる。「作者」が顔を出し、唐突に解説を行うのである。そこでは、漁村の俗信に関する研究書の一節が紹介される。その研究書によると、溺死者を〈エビス〉として祀るという有名な習俗に加えて、溺死しかかった者を助けると、災いが救助者に振りかかる、という俗信が存在したという古今東西の事例が紹介される。その難を避けるためには、溺死しかかった者を、再度水に戻す必要があるというのである。そして、現在でも、この俗信が生き続けているとしたならば……と語られる。

こうして、「わたし」は、これまでの事故は、妻の亡霊の仕業であると考えているが、俗信に根差した人為的な悪意の存在を仄めかして、物語は本当に終わる。

よく知られた民俗事例である〈エビス信仰〉を背景とした「わたし」の新たな「生」の獲得に関する物語のように見せながら、その背景となる俗信の細部が明かされることで生じる恐怖が描かれているのである。

まず、この物語におけるフォークロアの要素として、「わたし」の帯びる〈境界性〉について見ていくことにしたい。〈境界〉もしくは、〈境界性〉は、民俗学において、重要な概念となる。〈境界性〉は、異なる二つの世界に属し、その明確な区分がなされない状態、もしくは、その移行途上にある状態である<sup>5)</sup>。〈異界〉との交流時には、その交流の接点となる場所や、〈異界〉に足を踏み入れた人物が帯びている属性である。二つの世界に属し、その帰属が判然としない状態

であることから、日常ではない、混沌とした非日常を生み出す属性と捉えられた。

「わたし」には、この〈境界性〉が見出せるのである。なぜならば、「わたし」は、帰属する社会を捨てた者だからである。そして、それは「わたし」の妻も同様である。「わたし」は、長年連れ添った妻と一緒に、死ぬ場所を探して各地を転々としているのである<sup>6)</sup>。次の引用は、「わたし」が旅に出た理由を語る場面である。

放浪の旅とわたしは言ったけれど、放浪することが、わたしたちの目的ではなかった。わたしたちは、ほかにすることがなかったから、仕方なく旅に出たのである。(中略) 旅は、無意味なものだった。ただ、その旅の終わりに待っている一つの目的を除いては<sup>7)</sup>。

「わたし」は、特に死なねばならない理由もなく、社会との関わりを断ち、妻と共に目的もなく、各地を旅している。この「わたし」の現状からは、住み慣れた土地を離れ、見知らぬ土地から土地へと漂泊する非定住者としての相貌を見ることが出来る。土地に根付かず、漂泊を繰り返す者という属性から、「わたし」には、〈境界性〉を見出せるのである。しかも、当初の「わたし」は、死の世界に旅立とうと考えている。この「わたし」の旅は、死に至るための移行期と解せるのであり、定住－非定住という状態の変化だけでなく、生と死の領域の境に位置付けられることから、その〈境界性〉が強調されるのである<sup>8)</sup>。

さらには、鐘ヶ関の住人達にとって見れば、「わたし」は、外部から来た〈他所者<sup>よそもの</sup>〉である。ましてや、一旦は溺死した状態から生還した者である。それゆえ、〈エビス〉と呼ばれるが、ここでの〈エビス〉は、溺死者の意だけではなく、外部からの来訪者としての意味も包含されると言えよう。この「わたし」の帯びる〈境界性〉は、「わたし」に奇妙な体験をさせることにもなり、そのどっち付かずの状態ゆえに、帰属の整然化がなされることに繋がるのである。

## 2. 「わたし」の帯びる〈匿名性〉

「わたし」の帯びる「他所者」としての〈境界性〉に加えて、「わたし」の名前が示されないという〈匿名性〉もまた、「わたし」が〈エビス〉として扱われることを妥当なものとする。

名前、もしくは命名という行為は、未知の存在に対して、差し当たり理解を可能とするための方策である。博物学において、対象となる事物に対応する名前を付与することで、理解の一助とし、混沌とした自然を秩序化する狙いがあったことが知られる<sup>9)</sup>。「海贅考」の「わたし」の場合では、この名前が明らかにされることはなく、〈匿名性〉は保持されたままである。「わたし」という人間は、存在しているが、その名前がないという状態であるがゆえに、「わたし」は、秩序化された世界には位置付けられないのである。現に、「わたし」を救助した土屋は、氏名ともに明示されている。このことから、土屋と「わたし」が、その帰属する共同体内において、秩序化された者か、否かを示していると言えるだろう。

だが、「わたし」は、救助の後、鐘ヶ関の住人達からは、〈エビス〉と呼ばれるようになっていく。これは、物語中で明示されない本名を捨てさせ、〈エビス〉というあだ名を付与することで、鐘ヶ関の共同体内に位置付けようとする試みであろう。ただし、この〈エビス〉というあだ名が付与されることで秩序化は完了せず、次の段階に移らねばならないのである。この〈エビス〉というあだ名が付与されることで、「わたし」は、完全に〈エビス〉に転じなければならなくなったのである。「わたし」の名前が明らかになっていないのは、共同体内で周縁に位置する〈境界性〉を帯びた存在であることの補強であることに加え、〈エビス〉というあだ名が付与され、完全に〈エビス〉へと転じることの伏線とみなせよう。

### 3. 海と〈両義性〉について

主人公である「わたし」の属性だけではなく、物語の重要な舞台となる海という場所にも、その特異な属性を指摘出来る。それは、〈境界性〉とも関わる〈両義性〉である。〈両義性〉とは、相反する性質を帯びている状態を指す。例えば、「聖」と「俗」の混在などが挙げられる。ここでも、二つの属性の混在により、その変則的な状態が、通常とは異なる力を帯びると考えられた。その一方、一つの枠に納まらないことから、忌避の対象ともなる。〈両義性〉は、当事者だけではなく、対峙する者にもまた相反する感情を喚起するのである<sup>10)</sup>。

海の場合は、豊かな海産物をもたらして人々を潤し、遊興の場ともなる。ところが、津波などにより甚大な被害をもたらす災いの源泉ともなりうる。このことから、海もまた正・負相反する〈両義性〉を帯びた場であることが窺われる。海の〈両義性〉は、海の遙か彼方に、楽園を含む他界が存在するという「海上他界観」や、怪異が出没する場として伝承されていることから首肯出来る。

「海贄考」においても、漁業を生業とする者達に、海の恵みをもたらす〈えびす〉が出現する一方、「わたし」のような災厄をもたらす可能性のある存在をも生み出すのである。そのため、「わたし」をどっち付かずの状態から転じさせようとする目論みが展開されると言えるだろう。

### 4. 〈エビス信仰〉についての言及

「海贄考」では、「わたし」が蘇生したことを受けて、「わたし」は〈エビス〉として扱われるようになった。この「わたし」の境遇の変化に伴い、その原因である〈エビス信仰〉についての説明がなされる。次に引用するのは、「海贄考」での〈エビス信仰〉についての言及である。

エビスは、豊漁をもたらすと信じられている、漁師の守り神である。村には、恵比寿神社もあり、漁民たちはその氏子である。エビスは、無論、例の七福神の一人、風折烏帽子をかぶって、狩衣に指貫姿で大きな鯛を釣りあげている恵比寿様のことであるが、漁師たちは、

たとえば鯨やイルカもエビスと呼んだし、海中から拾ってきた石をエビスと崇め、その神体にして祀っている漁家などもあった<sup>11)</sup>。

溺死者を漂流神にし、寄神とみる信仰は、不吉を吉に転じる心情が、長い間のうちに彼等のなかに培ってきた怖れと祈りを、よく物語っているように思われた。そして溺死者は、ふしぎに豊漁を約束するという。死体の持つ忌まわしさの呪縛から解き放たれたい心が、そうした思いこみとなって、伝えをつくりあげているのだろう<sup>12)</sup>。

この〈エビス信仰〉についての言及は、七福神の恵比寿様などの事例からも窺われるように、有名なものである<sup>13)</sup>。ここでは、〈エビス〉についての紹介がなされ、「わたし」が鐘ヶ関の人達に〈エビス〉と呼ばれるようになった経緯が説明されている。この〈エビス信仰〉についての説明により、「わたし」が〈エビス〉として、土屋家で生活させてもらうことの必然性を、表面上は解き明かしているように見える。だが、この〈エビス信仰〉には、あまり知られていない伝承があり、その伝承も含めて、現在の「わたし」の境遇を再考すると、異なる側面が見えてくるのである。

〈エビス信仰〉についての言及は、物語世界の彩りとしてではなく、「わたし」の境遇の説明となっているように提示される。だが、この〈エビス信仰〉についての伝承では、「わたし」の知らない語られない部分こそが重要であり、物語内で起こる事件の真の説明となるのである。つまり、物語の前半では、〈えびす信仰〉の有名な伝承の提示に止めることで、物語の結末における恐怖を強調する効果が指摘出来るのである。

## 5. 〈作者のあとがき〉における民俗学からの引用

### 5.1. 学術的成果による恐怖の喚起

「海贄考」で、「わたし」は、〈エビス〉として、鐘ヶ関の地で骨を埋めるつもりでいる。しかし、その間、漁の最中に海に落ちたり、井戸に転落するなどの事故に見舞われる。この事故に対して、「わたし」は、死んだ妻が、自分を死の世界に引きずり込もうとしているのではないか、と思い、妻には悪いが、まだまだ自分は死ねないという決意を表明している。次の引用は、死んだ妻に対して語る「わたし」の様子である。

「けれども、僕は、行かないだろう。死んだって、殺されたって、君のいる世界には。もう二度と」華を手向け、香を焚き、水をかえて、わたしの一日ははじまる。どんな一日だっていい。わたしはいま、満足している、と思った<sup>14)</sup>。

「わたし」が、これまでの事故を妻の霊のなせる業と考えたのも、その裏付けとなるような伝

承を知っていたからである。「死んだ人の霊が、生者（身内）をあの世に連れていく」という有名な伝承がそれである。また、「水死した人の霊が、生者を水に引きずり込む」という伝承も該当するだろう。しかも「わたし」の場合は、心中の果てに、自分だけが助かっている。こうした状況から、「わたし」が、妻の霊による仕業と考えたことは、短慮として否定されるべきものではない。「わたし」は、この自分の判断を「正解」とし、妻との決別を宣言している。「わたし」のこの判断は、判断材料となる有名な伝承を根拠としたものである。しかし、「わたし」が「正解」だとした判断には、後に疑問符が生じることになるのである。

「わたし」が、新たな生を生き抜くことを宣言し、明るい未来を予感させるように物語は一旦の終わりを迎える。だが、続いて〈作者のあとがき〉という短い章が出現する。そこでは、益田庄三の『漁村社会の生活慣習』という研究書の一節が紹介される<sup>15)</sup>。この書物は、実在のもので、1973年に白川書院から上下巻の構成で出版された。著者の益田は、漁業史や漁労民俗の専門家であり、京都大学文学部社会学教室の助手や、甲南女子大学の教授を務めた人物である。同書は、漁村に伝わる俗信についての重厚な研究書である。また、「海贅考」の物語の末尾の「参考文献」にも書誌情報が挙げられている。この書は、赤江にとって衝撃を与えた書であったようで、泉鏡花文学賞を受賞した『海峡』の中でも同書に触れており、同書からの引用を行っている。この益田の書からの引用により、これまでの「わたし」の明るい今後の予感は一転し、「わたし」を待ち受けるであろう暗い展開が知られるのである。次の引用は、「海贅考」の〈作者のあとがき〉の一節である（強調線は、引用者による）。

「今日では殆ど消え去ってしまっているが、嘗ては、〈溺れかかっている人を救うと、救った人がもっと大きな災害を受けることになる〉という俗信が、諸民族の間にみられた。このような原始教義は、いろいろな形で、民俗の思想を規定していた。例えば、

（一）人間の靈魂は、殊に変死者のそれは、怨みを生者に向かつてはらす。

（二）水死せんとする者があるのは、それは神の意志によるものである。だから、水溺して死のうとする人を救うのは、神の意志を妨げることになるから、早晩、神の怒りにふれて、自分も溺死するようになる。

（三）水の霊は、ささげ物として人間を要求する。水死者はそのささげ物であるから、これを救えば、その怨みが自分にかかり、何時かは自分も溺死するようになる。

（四）川や海の水死者は、一〇〇年間宇宙をさまようべく運命づけられている。

（五）海で遭難するのは、目に見えない神の怒りにふれ、神に見離されたからである。そのような人を救うのは、神の意志に反する、などである。」<sup>16)</sup>

引用から窺われるように、「わたし」が自分の近況についての判断を下したのは、（一）の俗信に拠っている。だが、本来「わたし」が注目すべきなのは、続く（二）、（三）、（五）の俗信なのであるが、残念ながら「わたし」が馴染みのあるのは、（一）のみで、その他には、〈エビス信

仰〉に関する有名な俗信を把握しているにすぎない。そのため、知らぬが仏という状態であることに満足しているのである。

現在では、その研究対象の変化はあるものの、通常、民俗学は、農村漁村に伝わる伝承・風習などを記録し、伝えるという目的に加え、単なる記録に止めず、調査者による分析・考察を含む。その考察の過程で、外部の視点からは、一見「非合理的」とみなされうる内容に、土着の論理を見出だすことが希求される。すなわち、「非合理的」なものを、「合理的」なものに変換するという過程を盛り込む必要があると言える。ただし、ここでの「合理的」は、「科学的に正しい」ということに直結する訳ではない。科学的誤謬を含みながらも、その内容が、現地でいかように解されているかを辿ることである。

「海贅考」で紹介される溺死者に関する俗信は、事例報告であり、現在とは異なる思考様式を伝えている。この研究書からは、俗信を学術（科学）的に記述しようとする試みが示されているのである。しかし、「海贅考」に引用される学術的記載が提示されることで、この物語は、色調を変える。それは、「わたし」の判断に対する疑義を生じさせ、不幸な結末を容易に推測させるからである。すなわち、恐怖などの「非合理的」内容を消去し、学術の言説であるべき研究書が、反対に俗信から浮かび上がる恐怖を前景化させるのである。しかし、その恐怖は、怪異による恐怖ではなく、その俗信を信じる人間によってもたらされる恐怖の前景化なのである。

## 5.2. 歓待から排除へ ― 〈異人〉を〈エビス〉に転じること

「海贅考」において、『漁村社会の生活慣習』の一節が紹介されることで、この物語の性格は大きく変化する。それは、「わたし」の判断が誤りであり、「わたし」の知らないところで、「わたし」を本当の〈エビス〉に転じさせようとする試みが企図されていることを知らしめる。つまり、「わたし」が、歓待から排除へと移行される途上であることが分かるのである。この物語の転調は、〈エビス信仰〉を中核とした物語から、〈異人〉殺しの物語への転調と位置付けることが出来よう。

それは、「わたし」が〈境界性〉を帯びて鐘ヶ関に来訪し、〈エビス〉と呼ばれるまでになっているからである。この〈境界性〉、〈エビス〉としての認知ゆえに、「わたし」は、〈異人〉としての属性を有するのである。ここでの〈異人〉とは、外国人の意ではなく、民俗学・人類学における用語である。〈異人〉は、共同体の外部から来訪する非定住の漂泊民や、伝承中での〈異界〉から来訪する超自然的存在を指す。「わたし」は、その〈他所者〉であるがゆえに、〈異人〉として定位されるのである。

この〈異人〉をめぐるのは、〈異人〉を歓待することで富を得たとする伝承や、〈異人〉を殺害して、富を強奪したとする〈異人〉殺しの伝承がある。〈異人〉殺しの伝承は、夏目漱石（1867-1916）の「夢十夜」（1908）の第三夜で、〈異人〉の生まれ変わりである子が、殺害時の状況が、「こんな晩だったね」と父に告げるという「こんな晩」型を踏襲していることが知られている。この二つの伝承からは、富の源泉としての〈異人〉像と、外部からもたらされる富が、共通して

象徴的に描かれていると言えよう<sup>17)</sup>。では、「海贄考」では、〈異人〉殺しの伝承は、いかに取り込まれているか。

「わたし」は、〈他所者〉であり、〈異人〉である。しかも〈エビス〉になり損ねた男である。完全な〈エビス〉ではない状態であるため、その移行の状態であることは、鐘ヶ関の住人達にしてみれば、不吉なことである。そのため、本来あるべき世界に「わたし」を送る必要があるのである。そして、完全に〈エビス〉となった「わたし」が、鐘ヶ関に豊漁（富）をもたらすことを祈念している。まだ〈エビス〉になりきらない状態の「わたし」は、危険な状態であり、災いをもたらすことも危惧される。すなわち、水に戻してこそ、「わたし」は、〈エビス〉として受け入れられるのである。次に引用するのは、〈作者のあとがき〉における事例紹介の後の「作者」のコメントである。

主人公も、正確にはそのことに気づいていない。彼はただ、見えない殺意だけをひしひしと感じている。そして、妻が自分を呼ぶのだと、誤解しているようでもある。もっと恐ろしいものたちの心に囲まれて生きていることを、自覚してはいないようだ<sup>18)</sup>。

この「作者」のコメントからは、「わたし」が考えたような、妻の霊の仕業としての事故は否定されるが、全てが人為的な事故であり、その動機として、俗信の論理が披歴されるのである。こうして、「わたし」が、死者ではなく、生きている者達の手によって、〈異人〉として殺害されかけていることを暗示するのである<sup>19)</sup>。

このように、「海贄考」では、「わたし」が、完全な〈エビス〉にされかけていることに気が付かないでいることを示し、〈異人〉殺しの伝承の一変奏としての性格を浮かび上がらせているのである。

## おわりに

「海贄考」は、主人公「わたし」の奇妙な体験を描くにあたり、その体験の必然性として、民俗学における〈境界性〉を「わたし」に付与していた。さらに、その属性を強調するように、〈匿名性〉や、舞台となる海の〈両義性〉をも重ね合わせていた。

また、物語の重要な構成要素として、〈エビス信仰〉を取り込んでいた。そして、有名な〈エビス信仰〉に関する知識を参照するだけで、この物語を解説することが可能であるかのように思わせておきながら、物語の最後で、溺死者に関する俗信の事例を提示することで、事故の原因としての怪異を否定し、人間による恐怖を描いていたのである。この俗信の提示により、「海贄考」は、〈エビス信仰〉についての物語から〈異人〉殺しの物語へと色合いを変える。

つまり、「事故」に対する「わたし」なりの「合理的」解釈が施されたかのようにありながら、その原因を、別の俗信に求めることで、民俗的世界と近代的な「合理的」世界の接合を試みてい

たと言えるだろう。ここでは、人間による恐怖が前景化するが、その背後にある俗信の存在を明かす民俗学による学術的記載が、恐怖を喚起するという捻れが効果的に表現されていたのである。

本論では、「海贅考」における〈エビス信仰〉や、溺死者に関する俗信の受容について考察したが、赤江の文学におけるフォークロアの要素、およびフォークロアからの受容を探り、赤江にとってのフォークロアの位置付けを解明することを今後の課題としたい。

## 註

- 1) 「海贅考」の引用は、光文社刊の『灯籠爛死行』に拠った。
- 2) 赤江とフォークロアの関係について、作家の皆川博子（1929-）、森真沙子（1944-）、篠田節子（1955-）の鼎談において、森による「赤江が、フォークロアをよく題材とする」という指摘に対し、篠田が、「支配者の歴史によらない土俗の中にしか残らないものを上手く掬い上げている」と応じている。また、同鼎談を収録する『赤江瀑の世界』河出書房新社刊では、フォークロアについての項も設けられている。
- 3) 「海贅考」に言及しているものとして、〈作者のあとがき〉の意味について紹介する成田（2007）、赤江のフォークロアを題材とした作品の傑作であることを指摘する朝宮（2020）などがある。いずれも、「海贅考」が、赤江の代表作であることに触れており、あらずしも分かりやすく紹介しているが、解説に止まっている。なお、赤江の幻想文学作家としての位置付けについては、東（2009）に詳しい。
- 4) 日本近代文学とフォークロアとの関連を考察した研究として、野本（1997）や、ミステリー小説における民俗学的要素を、田舎と都市という観点から考察した福西（2016）などが挙げられる。そこでは、文学作品中に描かれる習俗や、伝承を下敷きとした作品の創造、創作上の「資源」としての民俗文化などが考察の対象となっている。
- 5) 〈境界性〉をめぐる議論については、ターナー（1996）による議論が有名である。それまでの所属する集団からの〈移行〉状態を、「リミナリティ」と呼び、その状態にある者が帯びる力を重視した。日本では、宮田登による妖怪論で、この〈境界性〉が注目された。宮田（2002）では、辻、橋、門などの〈境界性〉を帯びた場所と、妖怪の出現との関係が詳述されている。
- 6) 住み慣れた土地を離れて、定住することなく、各地を漂泊する状態にあることで、「わたし」は、〈境界性〉を帯びた〈他所者〉である。それゆえ、「わたし」は、〈人間としての異人〉たりうる。〈人間としての異人〉については、小松（1995）に詳しい。〈人間としての異人〉は、〈妖怪としての異人〉の対になる概念で、伝承中に登場する〈異人〉と異なり、実際の浮浪者、漂泊の芸能民、商人などの非定住民が該当する。これらの人々は、その非定住性から、共同体内で浮いた存在となる。
- 7) 「海贅考」『灯籠爛死行』p. 215。
- 8) 旅の途上にある状態は、移行中であり、目的地に着いていないがゆえに、〈境界性〉を帯びる。この〈境界性〉に関連し、近藤（1997）では、結婚を、花嫁の〈家〉から〈家〉への移行と捉え、その嫁ぎ先に行き着くまでの道行きを、〈境界性〉を帯びた状態と解している。旅と嫁入りは、移動距離の相違を含むものの、その基底に類似性を孕んでいるのである。
- 9) 博物学における物——名の照応関係については、三中（2009）に詳しい。同書では、名前のない対象に、一旦、名前が付けば、その対象の理解の一步となり、いずれ完全な理解につながるという発想が、妖怪を例に言及されている。同様の発想は、民話「大工と鬼六」で、隠されている鬼六の名前を当てれば、鬼六に勝てるとする展開と類似している。なお、「大工と鬼六」については、佐々木（2003）がある。ここでは、名前を当てるとする展開に、治水による自然の征服・克服の影を読み取っている。

- 10) 〈両義性〉については、山口（1975）に詳しい。〈両義性〉もまた、〈境界性〉と同様、明確な区分がなされず、かつ相反する性質を帯びるがゆえに、共同体内の秩序に揺さぶりをかける。「海贄考」では、海と海からもたらされる〈エビス〉が、〈両義性〉を帯びており、共同体内に、正負相反する影響を及ぼすと信じられている様子が描かれている。
- 11) 「海贄考」『灯籠爛死行』p. 236。
- 12) 上記前掲書、p. 238-239。
- 13) 〈エビス信仰〉については、古くは、〈エビス〉を、〈境界性〉、〈ケガレ〉の観点から記号論的に考察した波平（1978）、多様な〈エビス〉の神格としての位置付けを辿った米山（2002）などがある。
- 14) 「海贄考」『灯籠爛死行』p. 251。
- 15) 「海贄考」での〈作者のあとがき〉における引用は、『漁村社会の生活慣習』p. 409-410に相当する。なお、引用に際して、原典からの表記、記載内容の改変などは行われていない。
- 16) 「海贄考」『灯籠爛死行』p. 252-253。
- 17) 〈異人〉殺しの伝承や、富の源泉としての〈異人〉については、小松（1997）がある。ここでは、貨幣経済を浸透させる行商人などが、〈異人〉として捉えられ、こうした行商人のイメージが、伝承中の〈異人〉にも付与され、富の源泉が、共同体の外部にあり、〈異人〉が、富を村落共同体にもたらす存在として定位されている。その富を獲得しようとする欲望が、〈異人〉殺しの伝承の発生の要因の一つと考えられる。
- 18) 「海贄考」『灯籠爛死行』p. 255。
- 19) 実は、「わたし」が、俗信の信奉に起因する被害を被るであろう未来は、「海贄考」の物語序盤での鐘ヶ関に辿り着いた際、漁村内の道を見た「わたし」の感想に示唆的に表現されている。そこで「わたし」は、「漁村のなかのすべてのみちは、変哲もなく見えて、じつは巧まれた人智をめぐらし、その道づくりに密かな奇計が凝らされた細工みちではあるまいか」（p. 213-214）と感想を漏らしている。「わたし」は、道の細工に施された人智については気付いているが、「わたし」を、〈エビス〉に転じさせようとする住人達の奇計を見落としていると言える。

## 参考文献

- 赤江瀑（1986）『海峡 この水の無明の真秀ろば』角川書店。  
 ———（2007）「海贄考」『灯籠爛死行』光文社。
- 朝宮運河（2020）「作品ガイド 赤江瀑への十五の扉 フォークロア」『赤江瀑の世界 花の呪縛を修羅と舞い』河出書房新社編集部編、河出書房新社。
- 小松和彦（1995）『異人論 — 民俗社会からのアプローチ』筑摩書房。  
 ———（1997）『悪霊論 — 異界からのメッセージ』筑摩書房。
- 近藤直也（1997）『ケガレとしての花嫁 異界交流論序説』創元社。
- 佐々木高弘（2003）『民話の地理学』古今書院。
- ターナー、ヴィクター（1996）『儀礼の過程』富倉光雄訳、新思索社。
- 波平恵美子（1978）「水死体をエビスとして祀る信仰：その意味と解釈」『民族学研究』42（4）、日本文化人類学会。
- 成田守正（2007）「解題」『灯籠爛死行』光文社。
- 野本寛一（1997）『近代文学とフォークロア』白地社。
- 東雅夫（2009）「赤江瀑」『日本幻想作家事典』東雅夫・石堂藍編、国書刊行会。
- 福西大輔（2016）「ミステリー小説に見る「民俗の世界観」：「都市」から「田舎」への視点」『熊本大学社

会文化研究』14、熊本大学.

益田庄三（1973）『漁村社会の生活慣習』白川書院.

三中信宏（2009）『分類思考の世界 なぜヒトは万物を「種」に分けるのか』講談社.

皆川博子・森真沙子・篠田節子（2020）「鼎談 赤江瀑の呪縛——綺羅の文章に魅せられて」『赤江瀑の世界 花の呪縛を修羅と舞い』河出書房新社編集部編、河出書房新社.

宮田登（2002）『妖怪の民俗学 日本の見えない空間』筑摩書房.

山口昌男（1975）『文化と両義性』岩波書店.

米山俊直（2002）「えびす信仰の三源泉——海神・市神・福神のルーツと融合」『大手前大学社会文化学部論集』2、大手前大学.

